

## 「地域と共生する企業をめざして～人のご縁を大切に～」

(株) 間口 代表取締役社長 前田克巳氏

- ・ 我々は今、大きな変革の中にいる。特にITの進化は目覚ましく、加速化して、我々の生活に快適と便利と変化をもたらしている。距離や時間などあらゆる既成概念、媒体を介在しない新たな技術が開発されていく。しかしながら、IT化が進む裏側で、人と人との関わりがどのようになるのか、懸念している。
- ・ 戦後、日本の復興に向けてみんなが頑張っていた頃は、家族の絆が強かった。それが核家族化し、今では親と子どもの関係さえも希薄になっている。隣近所の人のことにも無関心になっている。しかし、隣近所の人、そして地域の人との心の触れあいを大切にし、自分の住む地域に人が集まり、にぎやかになり、企業が業を成す、そのように考えていかなければならないのではないか。
- ・ 株式会社間口の創業は1901年。ここ、大阪港にて港湾運送事業社として営業を開始した。現在は、国内8社、海外2社で海外から一般家庭までトータルに物の流れに携わる総合物流企業になった。事業は港湾物流事業、国際物流事業、国内物流事業、関連事業と大きく分けて4つの事業からなり、約6,500人の社員、1000台のトラック、全国130か所の事業所で事業を行っています。
- ・ 経営理念は、「人、物、金だけの企業グループでありたくない。すべてに心でふれあいたい。高い叡智、高邁な理想を目標とし、理念と現実を踏みたがえず、時の流れの中で、社会の変化に遅れることなく、情報を糧とし、去り行く時に榮譽を残し、よりよき未来を求める。そんな心で社会に貢献できる企業グループでありたい」。単に物を動かすだけの「物流」でありたくない、お客様の心、お得意先様の心、社員の心を大切に、社会の変化にぶれることなく、人のご縁を大切に地道な歩みを進めていく。そして知恵と勇気を持って循環物流を担える総合物流企業へと発展し、社会に求められる企業になる。という理念を大切にこれまで歩んできた。
- ・ また、110年続いてきた我々の会社の資源は、一生懸命働いてくれる社員である。グループの社是は「天の時は、地の利に如かず。地の利は、人の和に如かず」。社員は仲間であり、まさに人の和が一番大切であると考えている。
- ・ 間口の社会貢献に対する姿勢は理念や社是にも謳われており、歴代の経営者

も実行をもって社員にその在り方を示してきた。

- ・ 創業者は間口伊之助という。昭和 28 年 7 月に亡くなったが、香典を恵まれない人に寄付するよう遺言した。当時、まだ戦後の食糧難であったため、二代目社長の間口良男（現会長）は、香典を米でもらい、200 俵の米が集まった。その前月、九州を中心に死者 1,000 人、浸水 45 万棟、被災者 100 万人という大水害が起きたため、香典の米のうちの 150 俵を九州に送り、残り 50 俵を大阪府内の恵まれない人たちに配った。
- ・ また、二代目間口良男もその遺志を強く受け継ぎ、会社経営を通して、業界や社会に大きな足跡を残した。事業において特筆すべきは、日本初の企業内職業訓練学校を創ったことである。戦前の港湾は重い荷物を人間の手で運ぶ過酷で危険な仕事であった。しかし、戦後、流通革新の進展により港湾事業は日本の基幹事業として重要な役割を担うことになり、諸外国に対応した近代化が要求されるようになった。当時の港湾産業において、労働力確保問題は大きな比重を占めた。それも近代化、機械化に対応できる技術を持った優秀な技能労働者が必要とされたが、従来の荷役作業ですら一時的に港湾マヒが発生したほど、大阪港の労働力不足は深刻であった。港湾運送のみならずすべての企業の発展のために港湾労働力は必要とされていた。そのことをいち早く察知した 2 代目間口社長は、昭和 38 年、当時社員 300 人ほどの企業であったにもかかわらず、将来の港湾荷役の担い手の育成のために会社の利益をつぎ込んで訓練校を創った。オランダロッテルダム港まで赴き、自らカリキュラムを考え、訓練生と寝食を共にし、時には教鞭も取る、そのような熱意をもって訓練校の立ち上げに注力した。国がことの重要性に気づき横浜に訓練センターを立ち上げたのが昭和 47 年、弊社の訓練校設立から 7 年後のことだった。訓練校は 10 年の後、大阪府へ運営を移譲。現在では、【大阪港湾労働分所ポリテクセンター大阪港】と名を変えてはいるが、大阪港の技術労働者の育成施設として、間口が灯した火は受け継がれている。
- ・ 【友友会】時代は変わり、阪神大震災において弊社では社員の家族の 1 人を失い、100 人の社員の家が被害を受けた。神戸にも営業所があり、500 人のパート従業員がいたため、すぐに対策本部を立ち上げたが、事前の災害対策が十分ではなく、対応に苦慮した。また、当時の経営状況もあり、社員にはささやかなことしかできなかった。そのことを大いに反省し、現会長の発案で職員以外の従業員の傷病見舞金と社会貢献を目的に平成 11 年に友友会を発足した。会は会員の就業日数 1 日につき 2 円の会費によって運営されてお

り、社会貢献として、各種ボランティア団体、地域福祉施設への寄付金や災害義援金を拠出している。現在、会員は 3600 名を越え、正社員のみならずパート・アルバイト社員も多数賛同している。

寄付・寄贈先の選定基準は

- 1 地元である、大阪府、大阪市、港区、大阪港にかかわりがある
- 2 弊社の事業にかかわりがある
- 3 歴史的に弊社の社員がお世話になったこと

としており、港区の地域団体、施設などや交通遺児協会への寄付を毎年行っている。その他に大規模な震災が発生した折には、寄付を行っている。近年では、2008 年の四川大震災、ハイチの地震。そしてニュージーランドの地震が起きて、対応を検討しているところに 3 月 11 日の大地震が起きた。すぐに「友友会」からの寄付を決定したが、社員の志を受け止め、会社からも社員が出した金額と同じだけの義援金を出すことを決定し、発生から 10 日後、港区を通じて赤十字に寄付を行った。その後も社員からの義援金を募り再度 5 月に集まった義捐金を寄付させて頂いた。

ひとりの 2 円というわずかな金額であっても、積み重なれば大きな額になる。一人ひとりには微力でも集まって手をつなげば相当な力になる。これが全てのものを起こすときの原点だと思う。

- ・ 燃料の高騰やリーマンショックなど大きな時代のうねりの中で、日本の他の企業同様、弊社も苦戦しているが、「強い企業へ成長させたい」という思いで経営に取り組んできた結果、この度の震災の際に微力ながらお手伝いができる状態でいられたと、一丸となって間口を支えてくれている社員に感謝している。東日本大震災では、東北地方に事業所はないものの、「お得意先様や苦しんでいる地域の方々のお手伝いがしたい」そのための体制を整えるべく、地震発生翌朝に本社に対策本部を設置。親交のあった近隣市長の要請に応じ、3 月 14 日の朝には緊急救援物資輸送のために車輛とドライバーを提供した。その後も余震が続き、道路の寸断、燃料不足など数々の問題のある中、岩手県や福島県など被災地へ救援物資を運んだ。物流会社として、人々の生活を支えていることを再確認すると共に、持てる資材によって少しはお役に立てたことに喜びを感じると共に、震災対応を通じて更に社内の結束力も高まったと感じている。
- ・ 【海洋少年団】2 代目社長は、海軍航空隊所属であったこと、事業が海に関連することから、海を通じて地域文化の向上に貢献がしたいと考え、昭和 27

年、大阪海洋少年団を結成した。当団体はその後文部省・運輸省管轄として結成された日本海洋少年団連盟の下部組織として現在も少年少女の海に親しむ機会の創出と、海上での訓練を通じての人間育成を目的に活動を続けている。弊社では、運営のお手伝いの他、同団体が主催する天保山「ポート天国」というイベントで、カッターレースの審判などを行っている。

- ・ 【相撲とわたし】昭和 38 年、初代若乃花にスカウトされて相撲界に入った二子山部屋は封建的な相撲社会でも特に厳しいことで有名だった。体格を見込まれ経験のないままに入門した相撲界だったが、まじめに稽古に励んだ成果が実り、相撲教習所を主席で卒業、部屋のホープとして順調に昇格するが、膝の怪我が原因で親方の付き人となる。二子山親方は「土俵の鬼」とも呼ばれ、大変厳しい人であったが、この偉大な方の側近として過ごしたことがのちの人生において大きな財産となった。昭和 44 年に廃業後、縁があつて間口に入社したが、一般社会と相撲社会のギャップに戸惑いながら仕事に努め、30 歳を目前に現会長と出会うことでまた大きな転機を迎えた。

企業人としての生活に慣れてもなお、怪我による挫折で去った相撲界は私にとってコンプレックスでもあり、多くを語ることはなく昔の友人とも遠ざかっていたが、40 歳を過ぎてようやく自分の特徴として「相撲」を受け止めることが出来るようになった。

そこで、自分の特徴である「相撲」を使って会社にどう貢献できるのか考えるようになった。学歴も経験もない自分を雇い、管理職にしてくれた間口に恩返しに、自分の特徴である相撲を使って、「会社のイメージアップを図りたい」、「社内の元気を喚起したい」、また自分と同じく相撲界出身で一般社会に適応するのに苦しんでいる人たちが社会人、企業人として活躍するお手伝いをしたい。そういう思いでつくったのが、間口相撲部である。

- ・ 間口相撲部には大相撲出身者、学生相撲出身者ら男女合わせて約 30 名在籍し、実業団相撲部が活動している。実業団によるアマチュア相撲の振興の他に、日本の国技を活かした社会貢献活動にも力を入れている。二子山部屋直伝の自慢のちゃんこを提供する「ちゃんこ隊」は学校や老人ホームなど様々な施設でちゃんこ鍋をふるまう「出張ちゃんこ」活動を実施しており、回を追うごとに浸透し、お祭りや区が主催の歓迎行事、スポーツの大会など最近では多くの要請を頂き活動の場を広げている。その他、相撲の禁じ手を面白おかしく表現した「しょっきり」やちびっこ相撲などイベントの盛り上げ役としてパフォーマンスを行っている。ファインプラザ大阪（大阪府立障がい者交流促進センター）の秋のフェスティバルには長年参加しており、多くの

お客様に楽しみにして頂いている。

- ・ また、西日本実業団の会長および全日本実業団の副会長をつとめていることから、実業団相撲の運営サポートも行っている。堺市からの支援を受けて毎年6月に大浜で開催している西日本相撲大会では、園児たちの可愛い和太鼓や大阪学院大のチアガールが試合の合間を盛り上げてくれている。また、特別養護老人ホームから何百人もの高齢の方たちに相撲を見に来てもらっている。これらはすべて私のご縁からご協力頂いている方々だ。大会には遠く九州、沖縄からの来ている選手もいるが、観客が多いことに喜び、力が入った相撲を取る。

大会には、闘う選手、見る観客、それを支える事務方の3つの要素がある。ボランティア活動も同様であり、どれか一つの要素だけが完璧であっても3つのバランスがとれていなければ成功しない。

実業団とは別に大相撲に関する活動も行っている。十数年前、現役時代部屋の後輩であった鳴戸親方が大阪での部屋を探している際に港区の新たな名物づくりにと、築港高野山を紹介した。この活動もあくまで、「タニマチ」という立場でなく「鳴戸部屋励ます会事務局局長」という形でお金ではなくアイデアと人の縁で応援をしている。一人、一企業で支えるのではなく、地域や関係先取引先など応援してくれる企業・個人を募り小さな力を集めることで、大きな力にまとめることをしている。

この件について、私の夢は鳴戸部屋から横綱を出すことだ。若貴が横綱昇格時、宿舎近くの商店街が若貴の饅頭やグッズを売り出してとても繁盛していた。鳴戸部屋からも横綱を出して、築港の商店街や八幡屋の商店街が繁盛して欲しいと願っている。

- ・ 【港区と浪曲】港区と浪曲の縁は深い。明治から昭和にかけて港区には浪曲の常設館が何軒もあり、港で働く人々の疲れを癒していた。大正時代に建立された浪曲の碑は空襲で焼失したが、再建され今も築港高野山の境内に安置されており、毎年慰霊を兼ねた浪曲祭りが行われ、全国の名だたる浪曲師が集まる。浪曲は、娯楽の多様化により衰退しているが、義理人情や情愛など失われた日本人の心を伝える伝統芸能であり、かつて盛んだったこの土地でなんとか復活させたい。

その思いから、今春より季節毎に1回、計4回間口本社にて浪曲会を開催することとし、既に2回を終了した。1週間前の「夏みなと寄席」の際には300人の方にご来場頂いた。

会の運営は、主旨にご賛同頂いた企業や地域、団体の方から物心両面での様々なご支援により成り立っており、大変感謝している。後2回公演を実施することで、港区の皆様は浪曲の良さを知っていただき、観客の確保が見込めれば、いよいよ来春はこの港区民センターで浪曲会を開催したいと考えている。

- ・ 弊社の取組ひとつひとつは大きくも、カッコよくもないが、110年の長きにわたり先人から引き継がれてきた揺るぎ無い精神を継承し、事業と同じく無理をせず、自分の得意を活かし、小さなことでも、地道に、ひたむきに続けてきたこと。そして、その思いを語ることで共感し、行動を共にしてくれる仲間を増やしてきたことが、結果に結びついていると考える。

大阪港と共に成長してきた感謝を表すために、まずは地域の人に喜んでもらえること。その中でも、ご高齢の方々に喜んでもらえることを実行していけば、おのずから、次世代へもその思いが伝わりつながっていくのだと信じている。これからも、今まで同様、カッコをつけず、出来ることを一生懸命、地域の方々と手を携えて、港区が元気になり、港区を愛してくれる人を増やすお手伝いをしたいと考えている。

本日はご紹介したのは我々の活動のほんの一部であり、その他にも港区役所の方や地域団体、他企業などと協力して行っている活動があり、是非ともその連携についてもお話したかった。港区はもともと地域住民の意識が強く団結心あふれた土地柄だったことなど、皆様の活動の参考に、お伝えする機会があれば幸甚です。